

# ahaki

あはき あん摩・はり・灸のおしごと

**vol.03**

地域とつながる「あはき師」

**Summer, 2023**



## 「地域の暮らしを支える‘あはき師’の可能性を開拓したい」と語る北海道函館市出身の三浦維子さん

ahaki第3号は、冬の雪が残る季節から北海道も極暑となった夏にかけて、維子先生取材しました。

### 朝のジョギング

函館の観光スポット五稜郭公園で維子先生に会うことができた。時刻は朝の5時30分、園内は散歩やジョギングをしている人たちが行き交う。「おはようございます!」と、すれ違う人に必ず声をかける維子先生。先生は、発色の良いオレンジ色のランニング用のビブスを着用。元気な先生にとっても似合っている色。ベストには「Blind Runner」という文字がプリントされている。

### あはき師への道を選ぶまで

#### 最初の仕事は栄養士

高校から短大に進学し、栄養士を目指しました。短大に通っている頃はスクーターに乗り、車の免許も持っていました。短大を卒業した後は、水産加工会社に勤務し、食品検査員として4年間勤務、その後、高齢者施設の栄養士として働きました。

#### 眼の疾患のこと

29歳まで自分の目の病気を知らずに過ごしました。幼稚園の頃、テレビをみるとき細目をしていて、親が眼科に連れて行きましたが、目の症状については、よく判らないという診断。ある日、目の周囲の出来物で受診。医師から突然「自分の病気のこと知っていますか?将来全盲になる、子供は持つ予定ですか?」と、心の準備もないまま言われて、大きなショックを受けました。

#### 仕事の選択肢がないというイメージ

通勤は交通の便を考えると車がどうしても必要でした。ある日、自転車に乗っている人と接触してしまって・・・眼科医から



は、「運転しているの?」と確認され、進行性の眼科疾患であることを改めて自覚しました。

目が悪いと仕事がないというイメージだったのですが、同業の栄養士の先輩から函館視力障害センターで「あはき師」の資格を取ることができるという話を聞いていました。そこで改めてセンターを見学することになったのです。そして、この道を目指してみようと決意しました。その時、37歳でした。

維子先生は、それから3年間、あはき師養成コースで勉強と実技練習に励むことに。最終学年の3年生になったとき、同じ疾患を持つクラスメートの急激な視力低下を目の当たりにすることに。

視力に頼らなくてもできるあはきの仕事、この道を選んだことは間違いではなかったと、当時の切実な思いも語ってくれた。



## 開業して15年

### 治療院勤務後に開業を目指す

国家資格を取得してから地元の治療院に勤務しました。治療院には、マッサージがとても上手な卒業生の先輩がいて、いつも技術を盗もうと、懸命に見ていました。先輩は全盲の方だったのですが、「いつも僕のこと、じっと見てるでしょう」と笑いながら言われました。

ところが、勤務して半年後、昭和一桁生まれの頑固な父親の後押しもあって、急遽開業することになりました。今の治療院は、父が所有者だった賃貸アパートの一室なんです。だからアパート名は、'コーポミウラ'です。

そして当時、父は病を患っていて、その2年後に他界しました。



### 患者さんに支えられている

骨折で1ヶ月以上休んだときがありました。そのとき、最終的には患者さんに支えられている。そう思うようになりました。患者さんとの相性もありますが、自分は患者さんに守られていると思います。あはきの仕事は、医療的な要素もあるけど、サービス業でもあると思います。だから、人とのコミュニケーションが重要です。



### 家族の支え

毎朝5時30分に起きて、走った後は縄跳びをしています。治療院のあるアパートの隣が実家で、姉がいつもご飯をつくってくれます。治療院の準備をして家に戻ると、野菜たっぷりの朝食が待っています。お昼、そして夜も、姉のつくった食事のおかげで、夜の9時まで安心して治療に当たることができます。

ある時、姉が怪我で2ヶ月入院したのですが、食事がいつの間にか疎かになっていました。姉には本当に感謝しています。



### 地域社会に向けた活動

#### あはき師の医療と福祉の多職種連携に向けて

函館市内でも、あはき師のつながりが、縦にも横にも弱いと感じています。医療系専門職のようにチーム医療に入るとは、とても大切なことと考えるようになりました。

函館市では地域包括支援システムの取り組みとして、平成28年からスタートした医療・介護連携支援センターの活動があります。その研修会に参加したことがきっかけとなり、地域における多職種とのつながり、そして地域の暮らしを支える「あはき師の可能性」をとっても強く意識するようになりました。

#### 人とのつながりが活力

自分の強みは元気なこと。若い頃は仲間とともにYOSAKOIソーラン祭りの活動もしていて札幌でも踊っていました。あはき師になってからは、地域の中で何ができるのか?いつも自問自答し、顔が見える関係づくりをとっても意識しています。あはきの業団体もグループがありますが、まだまだ一つにまとまって活動ができていません。皆さん自分の仕事で精一杯だったりすることが多いのですが、意識の啓発に向けて積極的に活動していきたいです。



ahaki第2号は「あはき師の仕事の魅力を伝えるプロモーションビデオ」の特集でした。出演した4名のあはき師に向けられた問いがある。維子先生にも同じ問いをしてみた。

### あなたにとってのあはきとは？

かかりつけ「あはき師」として何でも相談できる、地域密着型の治療院を目指すのが、私にとっての「あはき」です・・・と言っても、私の場合は、白杖を使って歩行していますから、高齢の方に「大丈夫？」と、声をかけられるほうなんですけど・・・(笑)。だから、様々な専門職の方との出会いの中で、顔が見える関係性をつくりながら、いつも情報収集しています。地域の人から「motoさん」と呼ばれたいです。先生というより「もとちゃん」の方がいいですね。治療院の名前も「もと治療院」ですから。

### 「何でも相談できるところ」

プロモーションビデオには、すべての人に向けられたもう一つの問いがある。それは、「あなたにとってあはきとはなんですか？」である。維子先生の治療院に通う患者さん、そして近所の方は、こう答えると我々は考えた。「何でも相談できるところ」



## 夏の終わりに

ようやく涼しい風が吹くようになった朝、久しぶりに五稜郭公園を訪ねた。維子先生の姿がそこにあった。維子先生とすれ違う人の方から先に「おはようございます」と、声をかけている。「自分の存在を知ってもらおう」維子先生のこの言葉の意味を考えてきた。視覚障害であることに気づいてもらうだけのものではない。地域とつながろうとする、「あはき師」としての可能性を広げようとする、先生の意気込みそのものである。

### あはき師紹介

三浦維子氏 (もと治療院 院長 函館市)  
誰もが夏の向日葵を連想する人柄

人口約24万人、高齢化と人口減少が止まらない函館圏で、あはき師として何ができるのか、人と人とのつながりを大事にしながら地域における多職種連携の活動に力を入れている。函館視力障害センターにて、実技講師もしている。カリスマトレーナーの様に学生を励まし続けてくれており、同センター教官からの信頼も厚い。

## ahaki 創刊にあたって

北海道の函館市に視覚障害者の方を対象とした「あん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師」の養成施設があります。ここで学ぶ仕事のことを、頭文字をとって「あはき師」と呼んでいます。ahakiは、「あはき」の仕事の魅力、伝承医術としての「あはき」の奥深さについて、それらを未来へとつなげていく人を通して伝えていきたいと思います。

第3号は、「地域とつながる」あはき師の活躍をお送りしました。文中にあるプロモーションビデオは本誌のQRコードから視聴することができます。引き続きよろしくお願い申し上げます。

# ahaki

発行者  
国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局函館視力障害センター  
自立支援推進委員会 地域連携分科会  
公立はこだて未来大学 ぐらしのデザインラボ

vol.03  
2023年8月30日 発行

プロモーションビデオ視聴【QRコード】

